

第7回市史講座ミニレポート：令和元年10月19日（土）

「松江城跡の築城経緯と縄張り」

山上雅弘先生〔（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部技術専門員〕



今回の講座では、兵庫県まちづくり技術センター技術専門員の山上雅弘先生に、「松江城跡の築城経緯と縄張り」についてお話しいただきました。

はじめに、松江城の築城についてお話しいただきました。松江城の築城は慶長9年(1604)の藩主堀尾忠氏の急逝によって遅れたと言われています。松江城は慶長12年から築城が始まりました。「堀尾期松江城下町絵図」から、堀尾氏は、当初は広大な城域を城郭用地として計画していたのではないかと考えられるそうです。そして、築城とともに城下町も同時に整備を進めていったのではないかとと思われるそうです。しかしこの頃の幕府の締め付けという、西国の外様大名を取り巻く事情のため、計画の変更を余儀なくされました。そのため、松江城は外様大名の城の中では、特殊の構造であるということを踏まえてもらいたいと先生はお話を始められました。

堀尾時代に作製された「堀尾氏松江城下町絵図」から堀尾氏が計画した松江城の構造は大規模なものでした。絵図には、三之丸（現在の島根県庁）、御鷹部屋（現在の島根県庁別館・第三分庁舎（竹島資料室等）付近）、御花畑（現在の島根県立図書館付近）も書き込まれています。ところが、全国的な築城は慶長15年頃に終了していますので、幕府との関係を考えて堀尾氏としても築城期間を4年間で終了せざるを得なかったのではな

いかと思われます。そのため、計画としては広範囲を予定されていましたが、途中で終息したため本丸、二之丸、三之丸を集中して造り上げたのではないかと話になりました。

松江城が築城された慶長 15 年頃は大名の築城から幕府の天下普請（内堀内の平面形四角の城）への過渡期でした。そのため本丸、二之丸は外様大名の築城の構造をとり、三之丸は四角い天下普請の構造になっています。他の城にも、藩の中心が築城後に移る例はありますが、松江城のように堀尾氏の築城の頃から三之丸が独立していたのは珍しいそうです。これは堀尾氏の藩主（忠晴）と隠居（吉晴）が別の曲輪に居を構えていたからではないかと話になりました。

松江城は、広大な城域を城郭用地として計画していましたが、築城期間の縮小のため当初の計画の変更を余儀なくされました。本丸と二之丸については当初の計画どおり、厳重な防御を固めて造られています。

築城期間の短縮の影響を受けたと思われる、二之丸から三之丸へ降りる虎口（入り口）については造りが簡素で、防御の面からは弱い造りになっています。しかし、御廊下橋という格調の高い造りになっています。また、二之丸下ノ段の石垣は本来なら、櫓を建てるために強固な造り（石塁）にしなければなりませんが、実際は石垣が美しく長く並び造りとなっています。また、大手枡形（一ノ門前）の石垣には大きな石が使用されています。このような構造の特徴は築城期間の短縮のために、防御より格式と景観を重視することになったためと考えられます。

堀尾氏は、4 年間で城郭と城下町の都市計画をかなり進めたと思います。堀尾氏が壮大な計画を立てた城地と城下町は全てを完成させることは出来ませんでした。しかし、堀尾氏がこのような計画を立てて進めたことが、今の松江の景観に生かされていると思います。それが堀尾氏が現代に残した遺産だと思いますと締めくくられました。